山崎郷土報

NO. 111
20.4.20

兵庫県宍粟市教育委員会
社会教育課内
山崎郷土研究会
電話62－2000

千草屋平瀬露香のことなど

千種町岩野辺　上山　明

かれこれ三〇年ほど前、議会事務局長の研修視察で、滋賀県五個荘町の「近江商人の館」に行った際、明治十二年（一八七九）作成の『大日本新持丸長者鑑』なる番付表を発見、興味をそそられるままに目を移していくと、東方には大関三井、関脇住友……、西方には大関鴻池、関脇本間、小結鹿嶋、次いで前頭筆頭に平瀬亀之助という名があり、以前に郷土史家の鳥羽弘毅先生から、大阪の千草屋は大富豪になって、大阪経済を動かしていたらしいということを聞いていたので、「これだ！これが千草屋に違いない。」と直感したのでした。

鳥羽先生にこのことを話し、後日その資料のコピーを貰って確認してもらったものです。

昨年「宍粟鉄を保存する会」の立上げをし、たたらの研究や資料収集を始めました。

そんな中の十月二十日西播磨ビジョン委員会のチームの研修で千種町内の名所・旧跡の案内で西河内の「たたらの里学習館」の説明をしていた時、市教委文化財係長の田路さんから声を掛けられ、大阪歴史博物館の中野・井上両学芸員を紹介されました。

年が明けたら大阪の「千草屋」の歴史や最後の文化人と言われる「平瀬露香の歿没後百年展」を開催するのだと言って企画書をいただきました。そこで初めて平瀬亀之助が号を露香と称し、明治時代に大活躍をした大富豪であるとともに、三十一に及ぶ分野に亘る趣味や学問においても偉大な文化人であったことを知らされ、自分の不勉強さを恥じながら、この催しの期間に宍粟鉄を保存する会の行事として是非見学ツワーを実施したいと考えまし

目　次

千草屋平瀬露香のことなど　上山　明　1
鳩屋孫右衛門について（二）　下村　哲三　3
中華人民共和国北京探訪記　片山　昭悟　6
ふるさとの地名　西川　博敏　12
長谷山遊鶴寺跡の確認調査について　教育委員会　15
事務局だより　18
山崎歴史街道（十五）　会報部　18

た。

早速、会長と連絡を取りながら、バス代の交渉を進め、参加者集めに取り組みました。参加者が十分に集まるか心配しながら新聞発表をしたところ、次々に申込みがあり、始めの心配も杞憂に終わりホッとしたのでした。最終的には大型バス一台プラスマイクロバス一台となり、七十人ほどの人が宍粟をあとに、一路大阪歴博へと車を進めました。

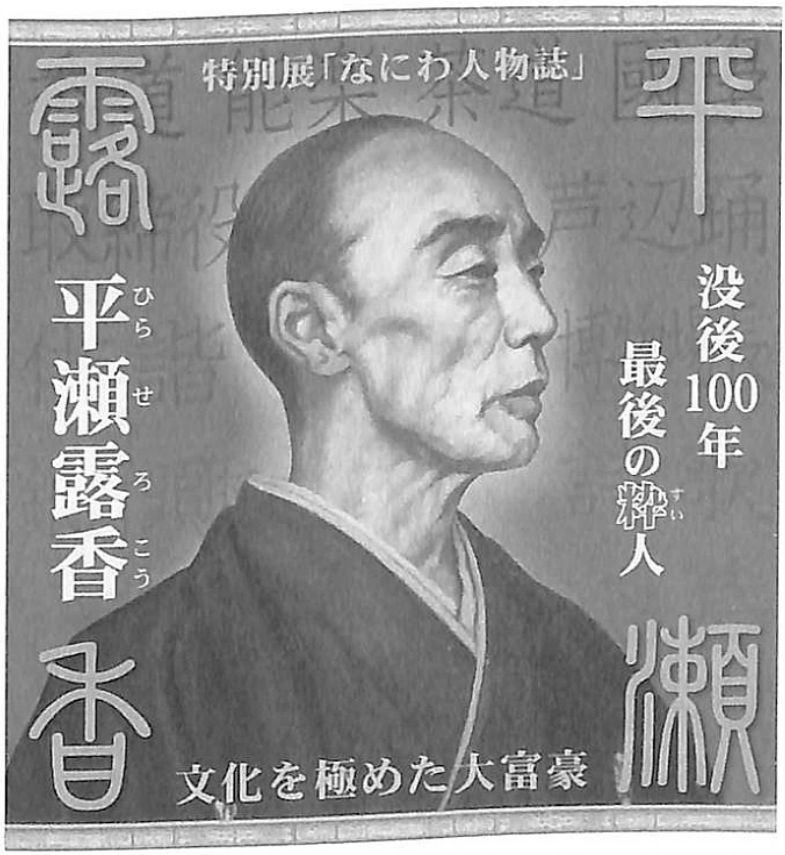
会場へは三十分ほど早く着き、十一時の開場と同時に貸し切りの食堂で、まず腹ごしらえを済ませ、展示会場へ、展示場は十階から七階は常設展示でしたが、この中にも「千草屋」の模型があったり、文書なども展示されており、江戸期から明治前半の大阪での千草屋の豪勢さが偲ばれました。

特別展は六階がメインで、露香・千草屋のおいたち―露香と能―露香と茶の湯―の三つのテーマに分けた展示で、多岐に亘る分野の展示も各所に並べられており、趣味とは言いながらも、どの道においても一流の師匠・師範に学び、奥義極意を修得するまで修業していたことに敬服し、使用した道具調度品も国宝・重文級のものが多いことにも圧倒されました。

才色兼備という言葉がありますが、加えて財力と教養学問までも当代一流のものを身に着けた希代の逸材であったことに思い至り、田舎での噂や語り草を鵜呑みにして、単なる富豪・富裕人とのみ捉えていた我が身の浅薄さを恥じ、赤面しきりといったところです。

「たたら」のことについても今少し学びを深めたいと思っています。皆様のお手許に関連資料がありましたら、ぜひお知らせいただきたいと思っております。

連絡先　…　郵便番号六七一―三二一一
宍粟市千種町岩野辺　電話　七六―二二四八



平瀬露香の歿後百年展

鳩屋孫右衛門について（二）

下村哲三

五、東西の出石浜

東西の出石浜を全般から見て良港と云えよう。揖保川水系はその源を、宍粟郡繁盛村藤無山を基幹とする一連の中国山脈に発し、公文川、草木川の諸川を合わせながら、山岳重畳の間を縫って、一宮を南西に流下して曲里に達する。ここで鳥取、兵庫両県、奥谷村の戸倉峠に源を発し、音水川、水谷川等の諸川を合わせて波賀町の渓流を南東に流れる引原川と合流し、一宮町から山崎町中央部のわずか上流へ伊沢川、三谷川が流れ込み、十二波（じゅうにんなみ）の難所に至る。

ここは水量が豊かな場所である。左岸の上部には堅木山（愛宕山）があり、その裾野の延長で岩が露出しており、上流との河床差が三米ほどあり、以北の高瀬舟航行は不可能である。東出石浜は岩盤でしかも、水深は深く、西出石浜は今では浅瀬になっているが、その昔高瀬舟が就航していたころは現状より河床は高く、水量も多く、今より約一米から一米五十は高かったと思われる。河床高が低くなった理由として、特に言えることは、昭和四〇年代より、昭和五十五年までの日本経済成長期で、しかも設備投資と、建築・建設ブームのなかで、川砂利を極度に大量に採取した為である。

六．出石浜の治水と管理

（1）十二波

昭和初期の山崎小唄の一節の「水にせかせて十二波のヨイヨイ」はよく唄われ親しまれたものである。

宍粟橋の上流二百米余のところには、堅木山をかたちづくった岩塊の根が洗い出されて、いわゆる怪石となっている。

揖保川は、この岩塊に堰かれて、しぶきをあげ、物凄い音を立てて流れるが、山間盆地の平凡な景色に見馴れた者には甚だ壮観にみえ、たくさんの波が立っている様を見て十二波（じゅうにんなみ）と呼んでいる。

蛍狩り、水泳、鮎狩り・ボート遊び、納涼、精霊流し等、初夏より秋に至る間は、この地の最も賑やかな時である。

揖保川水系（一級河川）は、標高差一〇〇〇米を一気に流れ下って、当河川で一番落差のある十二波に流れ込んでいる。

揖保川は県下有数の急流河川であり、堅木山を、かたちづくった岩塊が高さ四米、長さ三〇米と、流れ石の堆積場所の延長、八〇米で、物凄い音を立て流速は早く、又激しく、特に洪水時には怒りとかわったように、西側より東出石浜の方へ流れて、大嶽（おおだけ）に正面切っての衝突である。河原に立って感じるほのぼのとした情景とは別世界の近寄りがたく猛々しい水流となるのである。

（2）大嶽岩（高岩）

東出石浜北端に張り出した岩盤が大嶽岩である。風化もせず表

面は赤銅色しているが、古くからこの岩場が揖保川（十二波）落差三米の落水力を直接受けている。洪水に対する自然の要塞としての姿を保っている。この大嶽のお陰で東出石浜は大いに助かったことか。水流を南西方向に逃がし中央の流れに統合される。これが最初の自然堤防の仕組みなのである。

（3）屏風岩

次の仕組みは延長四〇米、高さ三米の屏風岩である。大嶽岩の少し下流にあり、流れに沿って現在の川の面よりも高い段丘を形成している地層で未固結の礫、砂、粘土からなっている。厚さは場所によって異なるが、数メートルある。岩の強度はやや堅く（石工用に使用可能）屏風岩の上部は、平坦であり広いから高瀬舟の積荷材料の仮置場として利用できる。帰り舟には塩、干魚、塩魚、雑貨、ほかに鉄山経営に必要な日用品（醤油、味噌）などがあって荷物の受け渡しや運賃の精算等の取引をする場所となっていた。

（4）リヤス式の停泊地

屏風岩のすぐ下流にノコギリ歯式の岩場があり、恰好の切込みで、浅瀬を利用して高瀬舟が停泊し、積荷を行なっていた。六艘は停泊して荷積が出来る場所である。

（5）石積出し堤防

安富町史の内で出石由来の事項で、石出しの名称を使っておられたのを、ここでは武田信玄公の『信玄堤書』の言い方を使って「石積出し堤防」とする。一日、二日と長雨が続いた後、台風が襲ってくるのが一番こたえる。大地の吸水力が限界に達したところで、時間雨量で五〇ミリクラスの豪雨に襲われるとなると、一軒や二軒の百姓家が潰されるだけでは済まない。集落がそっくり流されてしまうことさえある。

洪水を安全に流下させるには、堤防の機能を維持するため浸食対策、浸透対策と同時に洪水の越水対策のために堤防を強化する必要がある。流速を減少させたり洪水の流向を変えたり、さらに浸食防止や停泊中の高瀬舟の安全や舟の航路の安全性をはかる。

東西浜の治水管理上、一番の弱点は、石積出し堤防を越して流入する土砂、泥、流木の大小、塵等の堆積の除去と、石積出し堤防の部分的な修理である。

平成の現在では、年に二～三回は堤防をこして色んな物体が流れ込む、上流からは家庭塵、ビン、空き缶、建築物の壊れ、竹類、土砂、泥、流木等で大変迷惑が掛かっている。申し訳ないが、この際に書かせてもらう。当地区としては毎年一月の第三日曜日と

八月の第一日曜の二回にわたって、自治会の各組織は全員河川の（クリーン作戦行事）を行なっている。

江戸の昔でも、年に二～三回は堤防を越す事があったであろう。特に東出石浜の船着場は人工的に建設したものであるから、堆積物体は外部に出さないと船積み作業が出来ないため、人夫を総動員して除去にかかっていたものと思われる。

また、西出石浜は流速が早いため、十二波の土砂が大洪水の後には北の船着場より下流の船着場まで延長四〇〇米の間、土砂の堆積を除去し、場均しを行なうことになる。ここも大勢の人夫を動員していたと思われる。そうでないと舟の出入りが出来ないから。

（6）石積施設

十二波には無尽蔵に上流から流れ石があるため、先人の人々は、出石浜の建設には、ふんだんに大小の石を使用して堤防や坂路（搬出路）、擁壁を作っている。岩以外で水の衝撃を受ける所の石積み工事は頑強にしたもので、そのお蔭で今日まで残っている。

特に石積みの技術は最高の値打ちものである。東出石浜の代官舟見台と西出石浜の本多侯の水見台は、三百年以上のものであり、真に遺跡そのものであろう。

（7）代官所の船見台

なぜこんな所にひときわ目立った石積があるのかと、人によく聞かれるが、この石積は、高さ三・三米で十二波の川石とは違って、東出石浜地内の未固結の礫、砂、粘土からなる材質で立派なものである。近くに岩盤の掘削跡が延長八十米、深さ一、五米にわたって見られ、この岩石を使用したものといわれている。この石積の上に立ってみると、両岸の浜が一望に見渡せる。かつてその昔、高瀬舟の就航した時代を偲ぶと、舟の出入りと人の動きが掌握出来ることから、この場所で船番所の役人が状況調査、船の数量（運上金の徴収）舟の交通整理等を実施していたのであろう。またお代官が状況視察のための特別な高台でもあった。毎日百艘ほどの船が出入りしていた光景は壮観であったと思われる。

（8）本多侯の浜御殿と水見台

東出石浜が舟見台ならば、西出石浜は本多侯の水見台と浜御殿だ。山崎本多藩の別邸で藩主在国の節は、別名「水見御殿」ともいって夏場の涼を楽しみに家族共々出かけられて、家臣の水馬の稽古や水練を見られた場所である。

この本多藩の施設は大名らしく、小規模で石垣しか残っていないが、野面石を乱積方法で施工している。あたかもお城の石垣積のようである。

代官所の船見台

中華人民共和国北京探訪記

～奈良時代の鏡の源流をさぐる中国唐鏡の調査～

片山昭悟

一、はじめに

私は、二〇〇三年十月二十一日から二十五日に中華人民共和国の首都である北京を訪れ唐鏡の調査を行う機会に恵まれた。

今年の八月に北京オリンピックが開かれる。五年前に私が訪れた時は、会場となる北京市内の北部は、オリンピック施設の建物工事が行われているところであった。

今回、北京の天安門広場東にある中国国家博物館での中国唐鏡の調査報告と北京を訪れての概要について紹介させていただく。

中国唐鏡調査については、これまで『山崎郷土会報』第一〇四号二〇〇四・九に拙稿「奈良時代の鏡　瑞雲双鸞八花鏡の起源を探る」を、第一〇五号　二〇〇五・四に「中国シルクロード紀行～心のふるさとはるかなシルクロード～金谷鏡の源流を訪れて」を寄稿させていただいている。

二、北京での中国唐鏡の調査について

今回の調査テーマは、

① 中国唐鏡の調査を行う。

中国国家博物館を訪問する。

奈良時代の鏡の起源とされる唐鏡の調査を行う。

② 中国の首都である北京の今の現地調査をする。

天安門広場や故宮博物院を訪れる。

中国の現状をみる。

北京は首都であり王都でもある北京の現地調査をする。

③ 万里の長城を訪れる。

④ 中国社会科学院考古研究所を訪れる。

⑤ 中国北京の書店とシルクロードの店などを訪れる。

⑥ 唐鏡の資料調査と紋様の現地調査をする。

⑦ 研究テーマである鳳凰、双鸞、朱雀、龍、玄武、花や雲の紋様調査をする。

このほかにも北京で見るところが多くある。瑠璃廠という歴史的町並みを保存した骨董品街や胡同（フートン）とよばれる中国の昔ながらの街並みと路地などを中心にして中国の現状を見ることができればと思う。

三、今なぜ北京へいくか

今なぜ私は中国の北京へいくのか。まず北京を訪問し、中国唐鏡の調査で中国国家歴史博物館や中国社会科学院考古研究所、故宮博物院とこの三ケ所を今この時に訪れたいと思ったからである。

また、中国へ行くことは、北京へ行かないと中国を語れないと

思ってからである。中国へ行って万里の長城や故宮、天安門を自分の足で歩いて、目で見てないと話しができないと思ったからである。そして、山崎で唐鏡の中国語を訳していただいた中国財政部金融司の王洪貴さんにお会いしたい。それと唐鏡の調査で中国国家博物館へ行くことでさらに唐鏡の調査を行うことができればと思ったからでもある。

中国唐鏡の調査研究テーマは、

①中国からみた日本を考察すること。

②中国唐鏡を調査して日本の唐式鏡、奈良時代の鏡について考察したいと思っている。

③金谷鏡を考える上で重要な中国唐鏡をふまえて双鸞鏡、双鳥鏡を再調査すること。

④中国の唐鏡をふまえて奈良時代の鏡集成をこころみたいと思っている。

以上今回中国北京での鏡調査について要点のみ書きとどめる。

四、中国唐鏡の調査

今回北京を訪れた目的は、中国国家博物館での唐鏡調査である。それと、金谷鏡の瑞雲双鸞八花鏡の起源とされる鏡背面に描かれた紋様の調査を行いたいと思ったからである。

唐鏡の調査に行こう、是非とも行きたいと思ったのは、中国国家博物館に所蔵されている二面の唐代の銅鏡を是非一度自分の目で実見してみたいと思ったからである。

一面は、河南洛陽から出土した螺鈿の人物鏡で、人物の紋様が鏡背面に描かれている。小林行雄『古鏡』学生社一九六五に紹介されている。

日本では螺鈿鏡は、正倉院宝物鏡がよく知られている。北倉に七面と南倉に二面が収蔵されている。私はこれまで正倉院展で観覧する機会があり、螺鈿の美しい輝きを見ることができた。螺鈿鏡は南海産とされる夜光貝を漆地の銅鏡に貼り付けたものである。正倉院宝物鏡の螺鈿鏡と対比してみたいと思っている。

このほかに東野治之著『正倉院』岩波書店一九八八には、新羅製の螺鈿鏡（湖巌美術館蔵）が正倉院宝物鏡とともに紹介されている。正倉院宝物鏡と非常に酷似している。私は正倉院宝物鏡がどこで造られて日本の奈良東大寺にもたらされたのかという疑問からであった。

私は正倉院宝物鏡が中国の唐で造られ正倉院にもたらされたものとの思いがあったから九月に西安を訪れて、その二ヶ月後に北京を訪れ、中国洛陽で出土した螺鈿鏡の現物を確かめたかったのである。そして、生産地は唐の長安で造られたものとの思いがあったからである。それと中国国家博物館に収蔵されていることから中国国家博物館で展示されていれば自分の目でみたいと思った鏡である。

もう一面は河南省の洛陽近くで、鄭州市から金銀平脱鏡が出土している。ここからは瑞雲双鸞八花鏡も出土している。鄭州は北京、南京、上海、西安に通じる中国の十字路で交通の要衝である。

五、中国唐鏡調査の経過

北京の中国国家博物館で、中国唐鏡を観覧できたこと書き留める。

私は二〇〇三年十一月二十一日から二十五日にかけて中華人民共和國の北京を訪れた。

北京を訪れた目的は、中国唐鏡の調査をするためである。

平成十五年度メトロポリタン東洋美術研究センターの研究助成を受けて十一月二十三日と二十四日に北京の中国国家博物館で幸運にも中国唐鏡を観覧できた。二十三日は新世紀国際旅行社有限公司のガイドの尹京哲さん、二十四日は霍春梅さんに通訳をお願いした。

中国国家博物館保管部の關雙喜先生、盛爲人先生のご配慮により観覧と写真撮影のご許可をいただいたことに感謝申し上げます。

二十四日の午前九時三十分頃から午前十一時まで多忙な關先生であり、電話や応対、原稿の打ち合わせなどがある中私のために貴重な時間をつくっていただいき唐鏡を中心にご指導いただいた。

關先生は研修で二ケ月間兵庫県姫路市の兵庫県立歴史博物館で来られていたと笑顔で話されていたことが私には深く印象に残った。そして、關先生と一緒に写真をとっていただいた。その後、忙しい中を保管部から特別展「大唐丰韵」注1の会場入り口までお送りいただき、幸運にも唐鏡の写真撮影は、フラッシュをせずに撮影することをご許可いただいた。

今回、中国への唐鏡調査に際して兵庫県立考古博物館の篠宮正様より中国国家博物館保管部の關先生をはじめ中国社会科学院考古研究所の劉先生もご紹介いただいた。

今回の唐鏡調査で二十四日に訪れ、一つのテーマで十五年あまりになるが長くしていて、ひたすら一生懸命していると相手に熱意が伝わるものであると思った。

写真１　中国国家博物館

關先生から鏡についてかなりこまかいことまでわかる人であるといわれたことが私にとって幸運であった。はじめは中国でも代表的な唐鏡を見られるのだろうか、お会いできるのだろうか不安であったが、今回、中国の北京長富宮飯店にあるＪＴＢの事務所の方や新世紀国際旅行社有限公司の方々のご協力により観覧できたものと思う。

中国国家博物館の關先生より唐鏡のことでご指導いただいた要点を書きとどめる。

なお、新世紀国際旅行社有限公司の霍春梅さんの通訳による記

述である。

①鏡の紋様のことは、平面の鏡を立体的に見てみること。

②内部は主体部の紋様で、界圏は宇宙を表すとされ、外部の紋様は副である。外縁の縁は八花、八稜は雲を表現している。綬帯は同心円結びである。

③唐鏡は唐の時代のものであるが、今に通じるものであると述べられた。

④正倉院宝物鏡は唐の皇帝がプレゼントしたものであろう。

⑤海獣葡萄鏡は多く出土しているが、調査の資料が少ないと思うと述べられた。

⑥江蘇省の揚州は、唐の時代には鏡の生産地であり重要な地である。

⑦唐の時代は、開放的であったこと。

⑧唐の時代は鏡だけでなしに、いろんな方面から調査するようにとのこと。

⑨私の感想については、かなり細かいところまで知っている。飾らない人である。熱心なまじめな人である。考古学の人は話しやすいと述べられた。

⑩關先生は、かつて西安のある陝西省の博物館におられて、偶然にも私の調査と同じ唐鏡の論文を執筆された感想を述べられた。

六、中国国家博物館で観覧させていただいた唐鏡について

今回、特別展の「大唐丰韵」で観覧し、特別のご許可をいただき写真撮影をさせていただいた唐鏡について『中國青銅器全集銅鏡』をもとに概要を紹介する。

①高士宴楽嵌螺鈿銅鏡

唐径23・9センチ　1955年河南洛陽出土

円鈕、飾り紋は螺鈿象嵌を用いて一幅の図を書いている。書の中は両老翁が樹の前に座っている。左側に一人阮を弾く。右側の一人は杯を持って飲み干している。前に一つ壺と一つ樽をおいている。後ろには侍女が棒物をもって立っている。樹の下に犬が一匹座っている。両側に鸚鵡が羽を広げている。樹の梢の上には四羽の鳥が飾られている。小鳥は枝の頭に立っている。大きな鳥は羽を振り樹の梢にいる。

下右には鷺（さぎ）、鸞と三羽の小鳥、その間には草や落ち葉が点在する。象嵌螺鈿の青銅鏡である。唐代の著名的工芸の珍品とされるもの。

写真２　高士宴楽嵌螺鈿銅鏡

②鑲嵌螺鈿雲龍紋鏡

唐径22センチ　河南陝縣後川出土

円鈕。主題紋飾は一龍、上に体を湾曲して、肢体の一つは伸ばし一つは曲げている。

後ろは頸に交わる。龍の周囲は流れ雲、人物花鳥鏡ともう一面の螺鈿鏡が展示されていたものである。

③金銀平脱鏡

金銀平脱鏡は羽人花鳥八花鏡で、36・2センチの大型鏡である。漆地に金銀の紋様を切り抜いて貼り付けている。これと同じ金銀平脱鏡技法は西安東郊長楽坡からも出土している。『中國青銅器全集　銅鏡』によると、113　唐　径36・5センチ　河南鄭州出土

円鈕と重弁蓮花の鈕座。主紋は双羽人（注2）と双鸞が羽を広げて飛んでいる。間に石榴の花と蜂蝶、禽鳥と流れ雲紋。この鏡の飾り紋は金銀平脱法の技法を採用している。

④銀平脱葵花鏡

円鈕。漆地に銀の花の紋様を切り抜いて貼り付けている。この鏡の飾り紋は銀平脱法の技法を採用している。

⑤飛天葵花鏡

唐径25・3センチ　1955年陝西西安（韓森寨）出土

八弁葵花形、円鈕、無鈕座。鈕の両側に各飛天は頭に宝冠を付けて天衣がひらひらとなびかせている。飛天は一つの手は前方にあげて向かい合わせ十四弁の花形のものを共に持っている。飛天の下方は祥雲で飾る。鈕の上には四道横線、その上には険しい山で飾る。山の頂上には祥雲が繞（めぐる）。鈕の下にも山峰で、峰の頂きには枝葉が繁茂した樹木が成長している。飛天の題材は唐鏡で常に見る紋飾りである。

七、中国北京への旅

十一月二十一日から二十五日まで私は、中華人民共和國の北京を訪れる機会に恵まれた。

五日間という期間であったが、中国国家博物館、中国社会科学院考古研究所、中華人民共和国財政部、故宮博物館を訪れた。中国国家博物館では、唐鏡の調査を中心に中国の宝物を調査できた。

今回の北京への訪問は唐鏡の調査が目的であった。奈良時代の鏡を考える上で中国唐鏡は極めて重要であり、現地を訪れて、中国国家博物館において現物を観覧できればと思っていた。

二十四日の午前九時三十分から午前十一時まで中国国家博物館保管部の關雙喜先生、盛爲人先生にお会いすることができ、一期一会の気持ちで接することを心がけた。

① 唐鏡の調査について、②拙著のことについて、③九月に西安へ行ったこと、

④鏡紋様について双鸞、綬帯を中心にご指導をいただいた。そして、特別展の中国唐鏡の螺鈿鏡、金銀平脱鏡など五面の貴重な鏡の写真撮影許可を關先生よりいただいた。關先生の特別の御配慮

により観覧、写真撮影できたことに感謝申し上げます。

八、まとめ

北京へ唐鏡の調査に行っての研究成果について概要をまとめる。

①中国国家博物館保管部關先生、盛爲人先生にお会いし、中国唐鏡についてご指導を頂く機会に恵まれ、知遇を得ることができた。

②特別展の「大唐丰韵」をみることができた。

③中国の代表的な唐鏡を実見することができた。

④特別展で展示されている唐鏡の写真撮影を許可いただいた。

⑤中国社会科学院考古研究所へ行ったこと。

⑥故宮に行くことができたこと。

⑦天安門、天安門広場、人民大会堂を訪れたこと

⑧万里の長城の八達嶺に行くことができたこと。万里の長城近くの懐来県から瑞雲双鸞八花鏡が出土している。

⑨胡同（フートン）を訪れることができたこと。中国の民家の生活に触れることができ、人の温かい心を学んだ。鐘楼や梵鐘を造っていた鋳鐘胡同の現地へも行く。

⑩中国の首都北京の今をみる。世界のリーダーシップをとる中国の北京を実感した。

⑪中国財務部の王洪貴氏に山崎で唐鏡（瑞雲双鸞八花鏡）についての中国語を日本語に訳していただいたご縁で訪ねる。後日、王さんよりファックスが届いた。

今回の唐鏡調査で中国の北京を訪れ、自分の足で歩いて見て聞いて感じて唐鏡調査とともに多くのことを学ぶことができた。

私は銅鏡の研究とともに永年積み重ねた調査と研究にかける情熱と人と人のつながり、そして、人の心が通じることではじめて調査ができ、研究ができるように思う。

このことをメトロポリタン東洋美術研究センターの研究助成で北京を訪れ学んだことを感想としてまとめる。

私のテーマは、孔子の『論語』にある「用之則行　舍之則蔵」である。

「之を用うれば則ち行い、之を捨つれば、則ち蔵る」と読み習わすとされる。

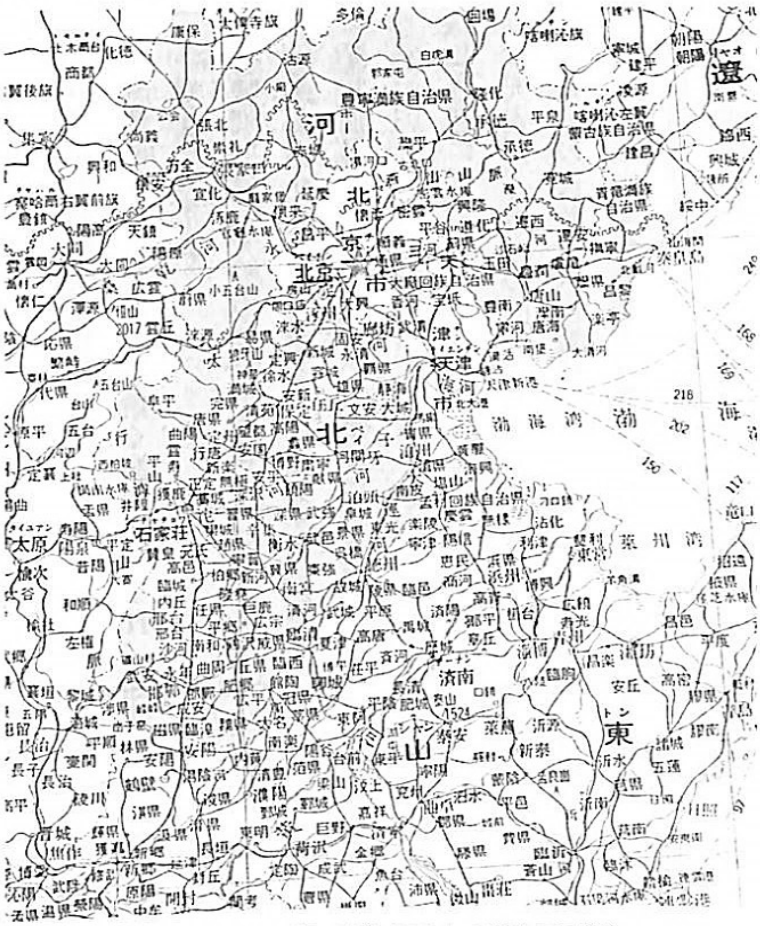
「起用されたら一生懸命働く。起用されなければ引っ込んでじっとしている。」

人に使われる立場の心構えを、孔子は論語にこのように紹介している。ちなみに孔子をまつる孔子廟は、山東省の曲阜市にある。機会があれば訪れたいところである。

なお、今回の拙い稿は『中国唐鏡調査　奈良時代の鏡 瑞雲双鸞八花鏡の起源を探る』２００４を一部改編して紹介させていただいた。

注1　「大唐丰韵（だいとうふういん）」とは、大唐のすがたやひびきの意味。

注2　迦陵頻伽（かりょうびんが）極楽に住むという想像上の鳥。美女の顔を持ち美しい声で鳴くという。



地図1　中国北京位置図（帝国書院）

ふるさとの地名

西川博敏

一、はじめに

「ふるさと」という言葉は、時空を越えて好きです。辞典をみますと、古里、故里、故郷、郷里、故丘などがあります。なんとなく「ふるさと」の語感から、ふるさとの「山河」と「ちちははの村」が脳裏に浮かびます。

ふるさとの山河やちちははの村に想いを馳せますと、ふるさとの生い立ちは、どのようであったのだろうか。ふるさとの地名は、どうしてできただろうか。

こんな想像から市立図書館通いが始まりました。末尾にあります参考文献から城下地区の自治会の地名の由来について至難な挑戦を試みました。全国にある同じ地名の由来等も調べてみました。

「地名は歴史の証人、文化遺産」だとも思われます。

微力な者で、しかも、高齢者ですから総合的な理解が、極めて不足しているかと思います。

お気付きの方は、ご指摘、ご高導くださればと念じています。

二、御名の由来

御名は、揖保川と支流菅野川の合流点周辺に位置しています。また、最近、市道船元中比地線の幹線道路が御名を南北に通っています。城下地区の文化の拠点ともいえる城下小学校が創立百有余年を経ています。

御名は、仏教用語の「五明（ごみょう）」に由来しているのではと言われています。この「五明」という地名は西日本を中心に小字名などに散見しています。

岩波書店の広辞苑でみますと、「五明」とは、仏教的な学問分類法で、五つの科目があります。その五つの科目は、文法学（声明）・工学（工巧明）・医学（医学明）・論理学（因明）・仏教学（内明）となっています。

歴史の流れから推察しますと、「五明」が由来である背景に市内屈指の巨刹西光寺があります。西光寺は、圓空（朝村）が永徳元年（一三八一）二月に「播磨ノ国宍粟郡野村ノ郷柏葉ノ庄御名ニ開山」となっており、仏教用語が使われたともいえます。

また、御名の地名は、名田の尊称したものが定着した可能性もあります。平安時代の顕秀書状（九条家文書）に「田原庄の内、御名方事」に「播磨国平野庄御名内田園事」などとあり、権門勢家の名田を御名と尊称したものともいえます。名田からくる尊称としての御名は、千本屋・野とともに雨祈神社の氏子圏を形成しており、これは、中世の比地御保の領域と思われる。

御名の地名は仏教用語の「五明」か名田からくる尊称かについてこれから古文書などから解明していきたいものです。

三、千本屋の由来

揖保川とその支流菅野川の合流付近より北側で、城下平地のほぼ中心地に位置し、南北に県道山崎・新宮線が通っています。JA城下支店の隣に城下ふれあいセンターがあります。また、地内東北部には、式内社雨祈神社（貴船神社）があり、隣接して奈良朝に創建された千本屋廃寺があります。

千本屋の地名は、定かでありませんが、何かを作っていたことに由来しています。京都市内に「千本通り」というのがあります。これは、「千本卒塔婆」などを作っていた土地と言われています。隣の新宮町の「千本」は、江戸時代初期から「千本の宿」で知られていた作州街道の宿場町で松の木が千本あったとも言われています。

千本屋出身の人に「千本」（チモト）という姓が多い。広辞苑でチモトを引けば、「幾本ともなく数の多いこと」と記述されています。ヤは、「家」の意味で何かを作っていた家といえます。例えば、推測ですが、卒塔婆とか線香のようなものを作る家があったのではないでしょうか。

江戸時代の寛文～延宝（一六六一～一六八一年）の田の面積をみますと、城下地区で千本屋は、一番多く二十二町五反（二二・五ヘクタール）で農業の中心地でもありました。安永九年（一七八〇）千本屋は家数が四十八軒で、庄屋徳右衛門さんの耕作面積

は四町六反もあり、奉公人が五人いたと、山崎町史に書かれています。

四、野の由来

城下平野の東部に位置する地域。集落は中央部にあり、西側に船元・中比地線が通り、北側には国道二九号線が東西に通じています。集落の南端に城東保育所があり、西側には雨祈神社（貴船神社）があります。

日本地名事典をみますと、「ノ（野）は、ヤマ（山）に対する語で平らで広い土地をいい、原野を開発した後に田畑を作った所」と書かれています。つまるところ、野の地名の由来は平坦な広い原野を開墾して田畑を作ったことにちなむものです。

宍粟市内には、「野」のつく地名が多くあります。野々上・清野・宇野・東下野・中野・下野田・上野田・福野・小野・上野などで、大小の規模の違いはありますが、なだらかな原野を開墾してできたことに共通しています。

平凡社の『兵庫の地名Ⅱ』をみますと、もともと野は、北に隣接する船本村のうちでしたが、同村から分村して成立したと考えられると記されています。また、各郷帳類では船本村に含まれています。もし、分村したのであれば、その時期などを定かにしていきたいものです。中世の播磨国衙別納十か所の一つに伏見宮家領の「比地御祈保（ひじごきほ）」がありました。「保」は半ば荘園で半ば国衙領でありました。この比地御祈保には、現在の野・千本屋・御名あたりの雨祈神社の祭祈圏でないかと言われています。

五、船元の由来

城下平地の東部を占め、揖保川沿いの地域です。南部から西部を国道二九号線が通り、中央部を中国自動車道の山崎インターチェンジがあり、道路公団大阪支所山崎料金所もあります。

船元の地名は、船の発着場（渡し場）でしたので船本となっています。とくに山崎から安志への交通上、揖保川を渡るのに最も適した地形であったためといえます。船本にまつわる事柄が古文書などに数多くみられます。その一部を記してみます。

江戸時代はじめの慶長国絵図には「船本村」と記されています。また、兵庫県史には姫路城主池田輝政（一五九六～一六一五年）が軍船「日本丸」を建造した際に、その碇は船本で千草鉄を打って造られたと記述されています。

譜代大名であった山崎藩の参勤交代は、五月中旬に山崎を出発して六月上旬に江戸に着きます。帰国は、六月下旬から七月上旬となっていました。その行き帰りには、船元の渡し場が利用されていました。船元の人々は、藩主をはじめ、家臣四〇人余の参勤交代の行列を迎えています。そのため、とくに道路に盛砂を敷き家の周囲をきれいにして迎えました。

その渡し場は今の山崎大橋の西北詰めで、藩主が乗船される場所は一段高い場所で、その近くに家臣が控える下座場もありま

す。

また、庶民は少し離れた北側にあります。

明治十九年（一八八六）の『地方行政区画便覧』に村名が船本村から船元村に改称されています。

長谷山遊鶴寺跡の確認調査について

宍粟市教育委員会

はじめに

宍粟市教育委員会では、平成十八年度より山崎町金谷の山中に所在する長谷山遊鶴寺跡の調査を進めています。平成十八年度には、寺院跡中心部の地形測量調査を行ない、平成十九年度は寺域のうち最も広い敷地を持つ中央平坦面に残された建物跡の配置や規模、遺存状況などを把握するための確認調査を実施しました。調査は現在も継続中であり、建物跡の詳細や寺院跡の全貌をつかむまでにはいたっていませんが、これまでの調査で明らかになったことについて中間的な報告をしておきたいと思います。

遺跡の位置

中世の山岳寺院として伝承されて来た長谷山遊鶴寺跡は、山崎町の南西部に聳える国見山（標高四六五ｍ）の南方、たつの市新宮町との境に近い狭い谷の奥部に位置しています。宍粟市指定名勝である比地の滝から、さらに八〇〇ｍほど北西にさかのぼった東向きの尾根の斜面に数個所の段状の平坦面が設けられており、石積基壇や礎石の一部、五輪塔の残欠、瓦片や陶磁器類などの散布が認められたことから、ここが寺院跡の中心部と考えられます。

周辺は宍粟市内でも最大の面積を有する城下平野が広がり、この地域の盟主墳と目される兵庫県指定史跡の金谷山部古墳をはじめ、金谷古墳群・上比地古墳、柏原城跡などの多くの遺跡の存在が知られています。

寺院の沿革

長谷山遊鶴寺跡に関する史料については、宝暦十二年（一七六二）に平野庸脩によって著された『播磨鑑』や、昭和初年に刊行された宇田義雄著『宍粟郡古城趾』・『播州宍粟郡名所旧蹟』などがわずかに知られているに過ぎず、寺院の沿革については多分に伝承的な要素が強いといわざるを得ません。それらによると、長谷山遊鶴寺はもと天台宗の山岳寺院で、観世音菩薩を本尊とし、最盛時には付近に十六、七ケ寺もあり、天正八年（一五八〇）に羽柴秀吉の軍勢が長水城を攻め落とした際に、山上の柏原城とともに焼き払われたものとされています。

寺域の概要

平成十八年度に実施した地形測量調査では、南北方向にやや広い東向きの急峻な尾根の斜面を南北約一六〇ｍ・東西約一二〇ｍ

の範囲にわたって段状に削平し、数個所の平坦面が設けられていることが確認されました。中心を占めるのは斜面の中央部に位置する平坦面で、南北の長さ約一〇〇m・東西の幅一五～二〇mの最大規模を有しています。西方の高い地点には南北の長さ約九〇m・東西の幅一〇～一五mの平坦面が位置し、東方の低い地点には南北の長さ約四〇m・東西の幅約一〇mのやや小規模な平坦面が設けられています。三個所の平坦面の他に、北側の谷に接する斜面や、中央平坦面の東下方の斜面にも寺院跡に関係すると見られる小規模な平坦面が認められました。

確認調査の概要

今年度の確認調査では、中央平坦面において礎石建物二棟、石積基壇を持つ建物三棟、石積み遺構などが検出されました。

平坦面の北部に位置する礎石建物Ⅰは、南北の桁行五間（約一二・〇m）×東西の梁間三間（約七・二m）の最大規模を有し、建物の方位は、ほぼ南北方向に合わせています。礎石は全部で一三個が残されており、五〇～八〇cm大の自然石を使用し、柱間距離は二・四m（八尺）を測っています。東側の礎石列の南二間分と、さらに南側にかけての全長約一〇mにわたって石列が確認されました。

礎石建物Ⅱは礎石建物Ⅰの北部に重複して検出され、桁行五間（約四・五m）×梁間五間（約四・五m）の規模を有しています。礎石は全部で一六個が残されており、三〇～五〇cmの小振りの自然石を使用し、柱間距離は約九〇cm（三尺）を測っています。礎石建物Ⅱは礎石建物Ⅰが廃絶してから、その跡に建てられたものと考えられます。

基壇建物Ⅰは、礎石建物Ⅰの南側に位置し東側全面と北側で石積みが検出されました。西側と南側については、石積みは認められませんでした。東側の石積みは長さ約五・二mで高さ五〇cm前後、一部に二段の石積みが残されています。北側の石積みは現状で長さ約五・〇mを測っていますが、残りは良くありません。基壇の上からは建物の礎石は検出されませんでしたが、南西部で南北方向に三間、東西方向に一間分の計七個の礎石が認められました。

基壇建物Ⅱは基壇建物Ⅰの南側約一七mを隔てた位置にあり、東側全面と北側と南側の一部で石積みが残されています。石積みの規模は南北が約六・五m、東西は残りの良い南側で約七・五mを測っています。東側の石積みは高さ二〇～三〇cmで、一部に二段の石積みが認められます。ここでも基壇の上には礎石が認めら

れず、西側で南北五間分、計六個の礎石列が検出されました。

基壇建物Ⅲは平坦面の最も南に位置し、東側のみで石積みが認められました。長さは現状で四・五m、高さは二〇～三〇cmを測っています。基壇の上からは、東西五間（約五・〇m）×南北四間（約四・〇m）の礎石が検出されました。柱間距離は約九〇cm（三尺）を測っています。南側一間分は庇になると思われ、さらに南側には二間×二間分の張り出しが認められ、内部に方形の石組みが残されていましたが、建物に伴うものかどうか明らかではありません。

出土遺物については整理が進んでおらず詳細については明らかではありませんが、中心を占めるのは、近世から近代にかけての各種の陶磁器類や土師器、銅銭（「寛永通寶」）、屋根瓦片、硯、飾り金具、釘などです。さらに中世に遡る遺物としては、須恵器の甕・椀、輸入白磁碗、備前焼の甕・壺片などが認められ、寺院の創建の時期を推し測る資料として注目されます。

まとめにかえて

今回の確認調査の第一の成果としては、中央平坦面の建物跡の配置や規模、遺存状況などが明らかになったことが挙げられます。

各建物跡の建立時期の詳細については今後の課題とせざるを得ませんが、最大規模の礎石建物Ⅰについては、あるいは中世に遡る可能性も考慮されます。三棟の基壇建物と礎石建物Ⅱについては、周囲の出土遺物の様相から今のところ近世以降に建てられたものと考えられます。また、各調査トレンチで検出された整地土層中からは釘などの鉄製品が出土しており、今回確認された建物の前身の建物が存在したことを示唆しています。

今後は各建物跡の築造状況や下層遺構の有無の確認をはじめ、出土遺物の整理と合わせて寺院の創建から再建、廃絶にいたる画期を明らかにする必要があります。また、このような壮大な山岳寺院が営まれた宗教的淵源や社会的背景、経済的基盤、信仰主体などを播磨地方の他の山岳寺院との関連も視野に入れながら地域史の中で位置付けていかなければなりません。

最後になりましたが、確認調査の実施にあたって格別のご理解とご協力をいただいた地元関係者の方々に心より感謝を申し上げます。

（文責　田路正幸）

参考文献

平野庸脩　一七六二（橋本政次校訂　一九五八翻刻）『地志・播磨鑑』　播磨史籍刊行会
藤平忠作　一九三四　「譲尾の観音と禅寺の鉦掛松と長谷の観音」『しゝさわ』第二輯　宍粟郷土研究会
宇田義雄編　一九三二　『宍粟郡古城趾』　編者発行
宇田義雄　一九三八　『播州宍粟郡名所旧蹟』　著者発行
杉山よしあき　一九五九・六〇　「明源寺考一・二・三」『宍粟郷土研究会報』三・五・六号　宍粟郷土研究会

赤松円裕　一九六〇　「柏原城跡並柏原構居跡」『播磨』第四五号　西播史談会
山崎町史編集委員会編　一九七七　『山崎町史』　山崎町
片山昭悟　一九九七　「金谷譲尾の観音様と金屋村鋳物師長谷川氏について」『山崎郷土会報』第八九号　山崎郷土研究会

事務局だより

平成二十年度当会の通常総会が開催されました

去る三月二日（日）午後一時三十分より、宍粟防災センター四階研修室において開催され、十九年度の諸報告及び、二十年度の事業計画等が承認されました。

役員の改選について、本年度は非改選の年ですが、ご逝去された山崎東地区支部長福井卓巳氏の後任として、柳田　弘氏に就任していただき、また、体調不良の蔦沢地区支部長福本亀男氏の後任に宗平圭司氏が就任しました。期間は残任期間です。

総会終了後、記念講演にかわりＶＴＲ「播磨国風土記　古代への扉」を鑑賞しました。

多数のご出席を頂きありがとうございました。

二十年度研修旅行のお知らせ

予定日　十月二日（木）　行き先候補地　県立考古博物館
大中遺跡　篠山城跡　丹波恐竜発掘現場など

『山崎歴史街道』（十五）

●山崎の史跡巡りをしませんか●

会報部

四十九　大福寺跡　　所在　山崎町塩山

県道五三号線の切窓峠を西へ、そしてまた、土万三差路を北へ県道一五四号線を進むと塩山に大福寺跡と刻んだ標柱のある所があります。

この寺は真言宗で創建時代は不詳ですが、赤松氏一族の者が住職となり、旧土万村全域を檀家としていました。しかし、天正八年（一五八〇）の羽柴秀吉による長水城攻略に際して、兵火にかかり焼失してしまいました。檀家は千種町室の西方寺と佐用町船越の常福院に移りました。住職の子孫はこの地に帰農して現在に至ると伝えられています。

五十　大沢五社神社の大シラカシ　所在　山崎町大沢

塩山の大福寺跡を過ぎてそのまま北へ進むと、大沢地区に入り、万合（まんごう）を経て一キロメートル余りの所に、左への坂道の入り口に大シラカシの標柱があり、その坂道を登っていくと、山麓に五社神社の鳥居が見えます。　その神社の社左手に大シラカシが聳えています。

神社境内には自生のシラカシ群生林があり、その中の一本が宍粟市の天然記念物に指定されている大シラカシです。大きさは根回り六メートル、目通り幹囲四・三メートル、樹高三〇メートル、推定樹齢三〇〇年です。

シラカシは材が白いのでシラカシの名が付いていますが、一方では幹の色が黒いので別名クロカシとも呼ばれています。

お宮の森は太古から自然林が多く、昔からの自然の状態を現していると言われています。

旅行・観劇・航空券
すぐお応えいたします

神姫観光

〒679-4167 たつの市龍野町富永503－1
TEL(0791)62－4000
FAX(0791)64－2030

創業明治28年・さつき本舗
四季の菓子
御進物・おみやげ・お茶うけに、四季折々の
真心こめた手つくりの御菓子を
御菓子司 あらき
本店・播州山崎町さつき通り 電162－0170

外科・内科
山中医院
院長 山中陽一
山崎町西町・TEL(62)0036

呉服とジュエリー
とくさや
本店 本町(さつき通り) 62-1680
咲ランド3F呉服のとくさや 63-0568
〃 2Fジュエリーとくさや 63-0557

PHOTO-STUDIO
Ueyama
P.C.S
スタジオウエヤマ
●山崎店 兵庫県宍粟市山崎町山田204
TEL(0790)62-8027
FAX(0790)62-8827

心のゆとりのおてつだい
安井書店
YASUI BOOKS
本店 TEL(0790)62-0700
さつき通り FAX(0790)62-2117
ブックランド店 TEL(0790)64-2051
山崎町中井 FAX(0790)64-2052

パンフレット・デザイン広告・名刺・封筒・伝票
新聞広報誌・ポスター・案内状・シール等
(有)稲田印刷
《本 社》〒671－2577 兵庫県宍粟市山崎町山崎454
TEL(0790)62－0254 FAX(0790)62－4764
《一宮店》〒671－4133 兵庫県宍粟市一宮町須行名496
TEL(0790)72－8600 FAX(0790)72－8611

清酒
山陽盃
SANYO HAI
兵庫県山崎町山崎
山陽盃酒造有限会社